

皆生温泉ふるさと伝承 ～海に湯が湧き一世紀～

1. 有本松太郎ものがたり・・皆生温泉の生みの親

<有本松太郎氏の思い>

☑ 伝承者 遠藤功德氏：「皆生温泉土地株式会社 35 周年史」

- ✓ 砂浜の荒蕪地にあつて、ともすれば波に洗われていた価値もない一温泉を、当時としては全く夢にも等しい大企画を以て、百年の大計を樹立、現在の如き殷盛の皆生温泉郷を実現せしめて、私達に、日夜限りない恩恵を与えている人こそ、故有本松太郎氏その人であります。(中略)私達は日夜その偉大なる温泉開発の先覚者を湯仰し、殊に温泉地帯の業者は共存共栄協調の和を以て、さらに一層の発展策を講じて、此の天恵の源泉を保護する事が、大恩人に報ゆる唯一の道であることを深く自覚せねばなりません。(後略)

- ・ この文章は、昭和 33 年 5 月 28 日皆生温泉土地株式会社の役員であつた遠藤功德氏が書いた当社の 35 周年史の序文の一説である。
- ・ 米子方面から皆生通りを進んでいくと皆生温泉の四条通りへとつながる。その突き当たり、遊歩道の真ん中に一つの胸像が建っている。皆生温泉の生みの親「有本松太郎氏」の胸像である。昭和 33 年 7 月に完成したこの像には当時の米子市長であつた野坂寛治氏による有本氏の業績をたたえる碑文が刻まれている。
- ・ 皆生通りは、米子と皆生間の輸送力を向上させるため有本氏が開発計画に盛り込んだ皆生電車の軌道が最初に敷かれた場所である。大正 14 年角盤町と皆生間に電車が開通し、大正 15 年になって県道米子 - 皆生線（皆生通り）が完成している。この道ができるまで皆生につながる道は、皆生通りの東側を通る車尾に抜ける道一本であつた。
- ・ 有本氏が皆生開発を手がけて第一歩である皆生通りの突きあたりに、有本像の置かれたことも何か感慨深いものがある。

- ・ 明治 33 年皆生の漁師たちによって発見された温泉であつたが、その後何人も人の手により温泉開発が試みられたようである。
- ・ 明治 44 年頃から福生村皆生の八幡市次郎氏が開発を手がけた。

☑ 伝承者 皆生温泉土地株式会社：「35 周年史」

- ✓ 海岸にわらぶきの小屋を建て之に浴場二つ設け、一つはコンクリート造りの浴槽で営業用、後一つは木槽として、之は専ら村民の為に解放することとし、湯は汲み上げるようにして、その場所からほど近くの海岸に、旅館八幡館を建てて経営に当たつた。こうして作った浴槽も、日によって温度が異り、又荒れた日には波につかるなどという危険な状態で、温泉経営など到底及ばぬ幼稚な方法であつたが、八幡氏は何とかいろいろと方法を考えながらその経営を続けていた。

- ・ 当時から海との戦いが始まっていたことを伺わせる。八幡氏は相当な私財を投入して温泉開発に取り組んだようである。その状況を見るに見かねて、当時米子に居を構えていた有本松太郎氏が、八幡氏の志を引き継ぎ、温泉開発を手がけることとなつた。

- ・ 大正9年6月有本氏は、遠大な計画を元に皆生温泉開発をはじめた
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」
 - ✓ 荒蕪の海岸の地を拓いて一大温泉郷とし社会奉仕とともに、地方発展に供するという理想を説き同志を募って東奔西走した。
 - ✓ この計画は要約すると次の通りである
 - 1.温泉を安全地帯に開発するとともに集中配湯
 - 2.広大な都市計画のためのあたり一帯の土地買収及び本格的な都市計画
 - 3.既存都市米子町及び米子駅連絡の交通計画
- ・ その後も次々と温泉開発への準備を進めていった。
- ・ 大正9年9月海中調査を実施し、数力所から温泉が湧出していることを確認した。
- ・ 同年11月旧藩主池田氏より門脇茂雄氏に払い下げられた約15町歩（15ヘクタール）の土地を買収した。この地は、三条から西側の現在皆生温泉街の中心地となっているところである。
- ・ 大正10年1月海岸砂地一帯の約8町歩を町所有の温泉の権利とともに買収した。その後、その手続きについて紛争があったようであるが、現在はそのほとんどが海中に沈んでいるという。最終的に民有地約16町、村有地約8町、合計約24町（240,946㎡）の買収に成功した。

<100年前の壮大な都市計画>

- ・ 大正13年3月 有本氏の皆生温泉街への思いは、専門家折下技師により「皆生温泉市街地区画設計図」として現実のものとなった。現在でもこの設計図の原本は、皆生温泉観光株式会社に大切に保管されているという。この設計図は、当時メインストリートであった三条通り（車尾 - 皆生線）を中心に描かれている。
- ・ 東西に三条通りを中心として東に一条・二条通り、西に四条・五条通り、そして南北には海岸側から一丁目・二丁目・三丁目・四丁目までの通りを作り、その一区画は千坪ずつに区切られていた。市街地は、商店街、住宅街、別荘地帯、旅館街に区分けされていて、学校、銀行、劇場、運動場、野球場、郵便局、公園などの公共施設なども配置されていた。京都の町並みを模して設計されたとも言われている。
- ・ 現在の皆生温泉を見てみると、交通の中心は四条通り(皆生通り)に移っているものの、当時の区画がほぼ同じように再現されている。特に、三条通りの幅員は当時のままと言うが、20m以上あり今見てもかなり広く感じる。
- ・ この設計図ができたころ、まだ手つかずの松林が広がっていた皆生の地に、このような壮大な一大観光都市を誰が想像しただろうか。また、そのイメージが100年以上経った現代にそのまま受け継がれていることに驚きを感じる。
- ・ 有本松太郎氏の想像力と先見性に感嘆の一言である。
- ・ 有本氏は公共のサービスについても充実に尽力した。米子 皆生間をつないだ皆生電車についてはよく知られているが、電車開業までの交通手段を確保するために、フォード製の12人乗り幌型自動車を車尾経由で運行させていた。

- ・ 大正 12 年 2 月に電話が開通しているが、米子から皆生までの架設費用を負担することを条件として交渉したようである。
- ・ 同年 6 月派出所ができているが、当時この建物も建設している。
- ・ 大正 13 年 7 月郵便局も開局の運びとなったが、皆生温泉街の利便性を考えて三条通りの中心に設置された。初代郵便局長は有本松太郎氏が就任し、建物や郵便局の維持費も負担していたという。

< 山陰線と共に米子にやってきた偉人 >

☑ 伝承者 皆生温泉土地株式会社：「35 周年史」

- ✓ 有本氏は文久 3 年（1863 年）1 月 7 日、兵庫県美方郡浜坂町栃谷に有本莊三郎氏の次男として生まれ。浜坂小学校卒業後、遠く長野県庁に奉職していた。その後、土木建設の会社に入社したが、志を立てて独立して有本組を組織した。
- ✓ 明治 19 年各地で河川が氾濫し日野川でも東八幡の堤防が決壊した、その復旧工事を請け負ってこの山陰にやってきた。その後、朝鮮に渡って朝鮮鉄道の工事にたずさわったこともあった。続いて始まった山陰線の新設工事には、名古屋の古川組の下請けとして活躍した。その後東海道線浜松 静岡間の複線工事にたずさわって、当時にしては相当の財を得て帰ってきたという。

- ・ 皆生温泉でみやげ物屋を経営する藤田氏は、母親が有本さんの姪に当たる親戚である。

☑ 伝承者 藤田信康氏：

- ✓ 有本さんは皆生温泉を開発する前は、土木請負業をしておられた。
- ✓ 山陰線の工事をするために米子に来られたと聞いている。餘部鉄橋の図面や山陰線の倉吉付近の設計図をご自宅で見せてもらったことがあると語る。
- ✓ 東町の錦織眼科の辺りに家があった。皆生温泉を開業する大正 10 年頃、自宅の離れに 7～10 人ぐらいの書生を住ませている、当時としては珍しい工業科のあった、米子工業高校に通わせていたという。

- ・ 大正 7 年 1 月有本氏は、鳥取県議会議員に初当選を果たした。土木請負業を譲り、県行政に専念したという。
- ・ 大正 12 年 9 月まで鳥取県議会議員を務めたが、その間皆生温泉土地株式会社の設立、米子電車軌道株式会社などの地元住民の生活向上のために様々な活動をした。

< 住民、企業、行政が一体となった成果 >

- ・ 偉大なリーダー有本松太郎氏の出現により、皆生温泉の開発のスピードが早まったことは間違いないが、地域住民や行政の力も見逃すことはできない。
- ・ 皆生温泉土地株式会社設立当初の株主名簿には、有本松太郎氏をはじめ 100 人を越える地元の出資者が名前を連ねている。また、村有地の売却においても地元を発展させるという大きな意志が感じられる。

- ・皆生温泉旅館組合の組合長を務める柴野氏によると。
- ☑ 伝承者 柴野憲史氏：
 - ✓ 曾祖父にあたる柴野勘太郎さんが大正 12 年眞寿屋と言う旅館を営んでいた。
 - ✓ 勘太郎さんは大正 10 年皆生温泉土地株式会社設立時の株主にも名を連ねており、一号泉の前で取られた写真にも写っているという。
- ・ 大正 10 年頃取られたその写真には一号泉を掘削した櫓をバックに、十数人の男たちが誇らしげに写っている。柴野さんのような地元の人たちも含まれていたのであろう。
- ・ 有本氏が手がけた最初の泉源は、三条通りの突き当たり、当時の波打ち際より少し陸に上がったところであったという。（現在は防波堤より約 60mの海中に位置している）
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 大正 10 年 7 月 31 日掘削に着手、工事は快調に進み、同年 11 月 5 日竣工引き渡しになった。深さ 36m、湧出量 240 立米 / 1 分、温度 72 度の優秀な温泉だった。
- ・ その後、多くの旅館が開業し、折しも大正の華やかな時代を迎え皆生温泉も大いに賑わった。温泉給配所の完成、温泉市街地工事完成、温泉電車開通など皆生温泉にとっては大いに盛り上がった時代である。
- ・ 時代が昭和に変わるころから“不況の波”が押し寄せてきた。大型旅館が相次いで休業するなど温泉会社の収入も大きな影響を受けた。温泉の配給も夏には余り冬には不足するという状況が続いていたため、安定的な供給体制を望む声が上がっていた。
- ・ そこで、温泉の開発を一時村営化するなど万策が講じられたが、その状況に追い打ちをかけたのが“海の波”であった。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 昭和 7 年 2 月 18 日の暴風による大波浪は大山館の前まで浸水し、泉源機械室もまた被害を受けて送湯が止まった、3 月になって復旧した。
 - ✓ 昭和 8 年 10 月 19 日初めて海岸海蝕の言葉が記録された。この時、一号泉は危殆に瀕し、村、組合及び会社が三位一体となって懸命に防護作業に努めてどうやら事なきを得た。
- ・ 昭和 9 年 10 月 15 日有本松太郎氏は辞任し、皆生温泉開発の夢は坂内義雄氏へと引き継がれていった。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 昭和 10 年 9 月 25、26 日の波浪は、一号泉を飲み込み、湯溜りタンクを倒壊させ泉井は砂の中に埋没した。直ちに全力をあげて復旧したが、一号泉はよみがえらなかつた。
- ・ 時を前後して、皆生温泉の創世期を支えてきた有本松太郎氏、そして記念すべき第一号泉が思い半ばにして、温泉開発の第一線から退くこととなった。

☐ 伝承者 藤田信康氏：

- ✓ 晩年、有本氏は皆生温泉の自宅に住んでおられた。伝承者（昭和4年生まれ）の小さいころは、すでに家の中で過ごしておられ、あまり顔を見たことがなかった。

☐ 伝承者 皆生温泉土地株式会社：「35周年史」

- ✓ 皆生温泉も浸蝕のために絶えず一喜、一憂の状態を呈しつつ、ついに内陸鑿泉の成功によって、現在の如く急速の発展と促し得たのであるけれども、氏の歩んだ本社創業時代から昭和初期に於ては、全く犠牲的苦行時代とも言い得よう。
- ✓ 有本氏は昭和16年5月13日、現在の盛時を見ることなく皆生の家に於て79才の高齢を以て卒去した。

<皆生電車>

- ・ 有本氏の功績として忘れてはならないのが、米子 皆生間を結んでいた皆生電車ではないだろうか。
- ☐ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」
 - ✓ 有本氏は皆生通り建設に便乗して、米子皆生間の電车道建設を企画した。過去の鉄道建設の経験から、当時米子 皆生間の交通機関は、電車が最も手っ取り早く確実だと考えたのだろう。
 - ✓ 大正14年4月1日米子町角盤町を起点とし、皆生温泉四条通り公園西側までだった。中古のいわゆるちんちん電車であったが、当時としては頼もしい交通機関であった。大正15年1月米子市角盤町から灘町回りで米子駅まで開通した。
- ・ 昭和初期の風情を感じさせるのが皆生温泉の入り口となった電車の停留所である。
- ・ 昭和2年皆生温泉の玄関である電車の停留所が完成した。松林の中に立つ停留所はよき時代の皆生温泉を彷彿とさせる。
- ・ 昭和3年1月米子の中心街を抜ける中央線が開通した。市街地の買収が難航したためであった。



昭和初期の皆生電車と皆生温泉駅
写真提供 藤田収康氏

☐ 伝承者 皆生温泉開発60周年記念誌：「皆生今昔」

- ✓ 当時は、ちんちん電車で至極のんびりだったのだが、有本翁のカンは的中、京阪神からやってくる“だんさん”たちは大喜び。ガメつくもうけ、気前よく使う - 京阪神の“だんさん”たちも「乗り心地のよい電車が一番でおます」というわけだ。

- ・ この皆生電車は、様々な人の思い出に残っているようである。
- ・ 皆生温泉で酒屋を経営する松浦氏（昭和4年生まれ）によると。
 - ☑ 伝承者 松浦茂氏：
 - ✓ 小学校6年生のときに廃止になったと思う。一日に数本電車が出ていたが、地元の人ほとんど乗っていなかった。冬になると客車の中に電熱ストーブのようなものがあり、珍しくて乗ったのを覚えている。
 - ✓ 電車道に平行してあぜ道があり、その道を福生小学校に通った。学校の行き帰りに皆生電車をよく見送ったものであった。

- ・ 昭和12年頃、九州から引っ越してきた森野氏（昭和4年生まれ）によると。
 - ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 森野氏は子どもの頃、からだが弱く電車で米子の病院に行っていた。角盤町の辺で降りていたと思う。子どもの遊びとして線路にボタンを置いて潰したり、線路に耳を当て電車の近づく音を聞いたものであった。

- ・ 当時、加茂町に住んでいた木田氏（昭和7年生まれ）によると。
 - ☑ 伝承者 木田達二氏：
 - ✓ 皆生電車も覚えている、石ころを線路において遊んだりした。まだそのころは加茂町の道は泥道であった。駅前の日興証券の辺が終点であったと思う。
 - ✓ 近くのおばさんが競馬に行くので電車に乗ってついていった。米子は市内電車があるなんてたいしたものだと思っていた。

- ・ 皆生温泉旅館組合の元理事長である岩佐氏（大正13生まれ）によると。
 - ☑ 伝承者 岩佐甲子郎氏：
 - ✓ 画期的な都市計画事業だと思う。皆生から米子まで直線で道がついている。当時、田んぼの仕切りに沿って道路をつけるのが普通であったはず。
 - ✓ 乗り手が少なくて廃止になってしまったと思う。その後、満州鉄道として売られていった。満州国建国に際して必要であったが作る暇がなかったのだと語る。

- ☑ 伝承者 藤田収康氏：昭和8年生まれ
 - ✓ 駅舎は終戦まで、その後はバス停として利用された。野坂さんという運転手が駅舎に泊まり込んでいた。終バスを運転して戻り、始発バスを運転して出かける。
 - ✓ 古い駅舎を改造して社宅のように住んでおられた。

- ・ 昭和12年米子国際飛行場が開場し、物資の輸送のため皆生電車の軌道が邪魔になった。
- ・ 昭和13年11月27日軍の命により皆生電車は運行を終え、翌月中には撤去された。
- ☑ 伝承者藤田収康氏：
 - ✓ 戦時中、三柳の米子国際飛行場から飛行機を修理するために、皆生の松林まで飛行機を引っ張ってきていた。そのために電車の架線が邪魔になったのではないか。